



姫路からJR播但線特急「はまかぜ」に乗ってまもなく、車窓から豊かな水をたたえた市川が見えた。播磨五川の一つで、かつてその上流には国内有数の銀山として知られた生野銀山があった。播但線は銀山と飾磨港を結ぶ「銀のみち」と呼ばれ、往時には年間八百万人以上の乗客を運んだという。

銀山の閉鉱は一九七三年。当時神戸の小学生だった私もこのニュースは記憶している。平安時代の開鉱以来千二百年、近代化を支え続けた大鉱山の歴史は、栄枯盛衰という難解な言葉とともに幼い私の脳裏に深く刻まれた。とはいえ、銀山をこの目で見たわけではない。告白すれば、播但線に乗るのも、今回の旅の目的地である神崎郡神河町を訪ねるのも、初めてである。自分を育んでくれた兵庫の土地をほとんど知らずして上京してしまったことには内心忸怩たるものがあった。

播磨の山あいに水と緑を訪ねて

〜大河内発電所と山崎伝統園芸植物研究所〜



新野町新野では、現在、新旧11機の水車が動いている。精米が行われている水車小屋で、「新野水車の会」の生田良昭さんに話を伺った(写真右上)。この日は午後から日暮れまで、町役場の小林英和さん(写真左上)が、新野から峰山高原、そして砥峰高原へと案内してくださった。

水車の町

「はまかせ」に揺られて約三十分、旅の起点となる寺前駅に到着した。神河町は、兵庫県のちょうど真ん中に位置する人口一万三千人ほどの町である。職業柄、旅を重ねてきたけれど、駅前に大きな建物やコンビニエンスストアがまったく見あたらないことに感動を覚えた。この町でいったい何と出会うのだろうか。期待に胸が高鳴る。

「あ、こっち、こっちですよ」
 手を振るのは、神河町を案内してくださる町役場地域振興課の小林英和さん。車中でさっそくコンビニを話題にすると、我が意を得たりといった面もちで説明してくださる。

「神河町は二〇〇五年に大河内町と隣の神崎町が合併してできたんですね。旧神崎町の国道沿いに一軒だけコンビニがあるのですが、旧大河内町側にはありません。若い観光客の方にもよく聞かれるのですが、みなさん信じられないと驚かれますよ」

便利さと引き換えに日本人が失ったもの。神河町はまずそのことに気づかせてくれた。

最初に訪れたのは、神河町の南端に位置する新野である。コットン、コットンと心地よい規則的な音が聞こえる。市川の支流に沿って田んぼが広がる新野地区では、

古くから灌漑用の水車が活躍していた。昭和初期には十八機あった水車が三機まで減ったとき、水車の町として再興しようと立ち上がった人々がいた。生田良昭さんを会長とする「新野水車の会」である。

竹や檜、樺を用いて、直径三mの水車が新たに八機つくられた。現在その一機で精米が行われ、春からは本格的に灌漑用にも使われる予定だ。水車小屋を再建するにあたり、水車のからくりや石臼のつくり方を研究した生田さんは、古人の知恵に感心することしきりであったという。

すすきの草原

水車小屋をあとにして、車は「段々田んぼ」を横目に見ながら山道を上っていく。中国山脈の東部播磨の尾根といわれる峰山・砥峰高原へ向かう道沿いには戦後植林された杉が整然と連なり、もみじの紅葉と相まって息のむほど美しい。冬の晴れた日には、標高一〇五六mの夜鷹山から明石大橋や四国まで見渡せるそうだ。

木々の鮮やかな緑や赤に見とれていた私は、やがて目の前に現れた光景にしばし言葉を失った。砥峰高原一帯に、広大なすすきの草原が午後の陽光を浴びて光り輝いていた。それは銀の海だった。神々しく、繊細で、まるで生命エネルギーを吹き込まれた天鵞絨ビロードの絨毯のように息づいていた。いや、そんな表現は後づけの説明にすぎない。未知の光景に向きあうとき、言葉の無力さを痛感



大河内発電所。左上に見えるのが上部の太田ダム、右下が下部の長谷ダム。発電所は両ダムを結ぶ山の中の地下280mに設けられている



▼交流館の蕎麦職人・草壁敬一さんが、すすきの葉(かや)でつくってくれたパッタ



約90haにもおよぶ、すすきの大草原が広がる砥峰高原。かつて、たたら製鉄の原料となる砂鉄を採取するため行った「鉄穴(かんな)流し」による起伏に富んだ地形一帯に、銀色の穂が波打っている。明治初期には軍馬の放牧場計画があり、馬が逃げないようにつくられた土塁が、計画頓挫後の今になって山焼きの防火帯として活用されるようになったと、「とのみね自然交流館」管理人の草壁利光さん(写真上)が教えてくださった。



する。実際このときの私は、ただ無言で立ちつくすだけだった。
 とのみね自然交流館の管理人、草壁利光さんがにこやかに近づいてくる。小高い山の頂を指さし、草壁さんは言った。
 「四月の第一土曜日の午後二時に、あそこに点火するんですよ」
 春の山焼きのことだ。すすきの草原は放置すれば樹木や雑草が生えてしまう。そのため、年に一回、地元の川上集落の人々がすすきを焼き払うのである。各家庭から一人ずつ、ほぞく棒という、水を含ませた火消し棒をもって参加する。草壁さんもこのときばかりは、既に独立した息子に連絡し、「山焼きやから帰ってくれ」と応援を頼んでいる。
 四月の火祭り、九月の観月会、十月中旬のすすき祭りと、年に三つの祭りで約一万人が訪れる砥峰高原は、もうすぐ雪の季節を迎える。

山あいの巨大蓄電池

山裾に広がる川上集落を眺めつつ山道を下ると、まもなく関西電力・大河内発電所の下部ダム・長谷ダムが姿を現した。発電所の上下にダムを設け水を循環させる「揚水式」では喜撰山、奥多々良木、奥吉野に続く関西電力四つ目の発電所である。サバイバル登山家で知られる作家の服部文祥が、北アルプスを登攀中に黒部ダムを見て、



▶大河内発電所の運転制御室。所長の森垣義樹さんから説明を受ける



◀長谷ダム

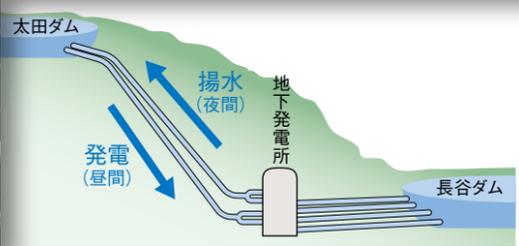


関西電力 大河内発電所

関西電力4つ目の揚水発電所として、1992年に1号機が運転開始。全4機のうちの2機が「可変速揚水発電システム」を採用。時々刻々変化する電気使用量と発電出力とのバランスが崩れると、電気の周波数が変化してしまう。周波数を一定に保つことは「電気の品質」にとって重要だが、従来の揚水発電所ではこの調整ができなかった。可変速揚水発電システムは、「弁」の開閉と、ポンプ水車の回転速度を変化させることで、揚水電力が小刻みに早く調整でき、夜間の周波数の精度向上を図るよう開発されたシステムだ。



▲▶PR館「エル・ビレッジおおかわち」。館長の柿原秀三さんに案内していただく。ガラス張りの床下には、発電所の一日を物語風に再現したジオラマが広がり、思わず見入ってしまう



ゆとりある夜間の電気でも水を汲み揚げ、電気の需要が増える昼間に水を落として発電する「揚水発電」。電気を水の形で蓄える、いわば「巨大な蓄電池」であり、電気と水の双方を有効に利用するリサイクル型のシステムでもある。

「特に高稼働の可変速機器は五年に一度は解体してメンテナンスをするのですが、大河内は運転開始後まだ十数年。データ量も十分ではありませんから、自分が予測したとおりの結果になれば、そりゃあ嬉しいですよ」
そういつて相手を崩す森垣さんは、まるで予防医療に携わる医師のようである。

「特に高稼働の可変速機器は五年に一度は解体してメンテナンスをするのですが、大河内は運転開始後まだ十数年。データ量も十分ではありませんから、自分が予測したとおりの結果になれば、そりゃあ嬉しいですよ」
そういつて相手を崩す森垣さんは、まるで予防医療に携わる医師のようである。

「のちを支える電気」
さて、崩落の危険がきわめて少ない閃緑岩のトンネルを抜けて、地下二百八十mの地下発電所に向かった。ちょうど五階建てのビルがすっぽりと入る巨大な地下空間に、四機の水車発電機（うち二機が可変速発電機）をはじめとする巨大な機械や制御装置が並んでいる。灌漑から発電に至るまで、水車とはなんと偉大な装置かと再認識する。水車のすぐ手前であって水圧鉄管の開閉を行う入口弁は、色も形も心臓のようで、これを一度でも見た人なら、体内を巡る血液のように、電気が人間のいのちを支える貴重な資源であることを痛感するだろう。
五代目所長の森垣義樹さんは、所長に就任して三年目になる。電気制御が専門で、長く保全に従事していたこともあり、機械の劣化をいかに事前に的確に判断するかが重要な任務だと考えている。

「のちを支える電気」
さて、崩落の危険がきわめて少ない閃緑岩のトンネルを抜けて、地下二百八十mの地下発電所に向かった。ちょうど五階建てのビルがすっぽりと入る巨大な地下空間に、四機の水車発電機（うち二機が可変速発電機）をはじめとする巨大な機械や制御装置が並んでいる。灌漑から発電に至るまで、水車とはなんと偉大な装置かと再認識する。水車のすぐ手前であって水圧鉄管の開閉を行う入口弁は、色も形も心臓のようで、これを一度でも見た人なら、体内を巡る血液のように、電気が人間のいのちを支える貴重な資源であることを痛感するだろう。
五代目所長の森垣義樹さんは、所長に就任して三年目になる。電気制御が専門で、長く保全に従事していたこともあり、機械の劣化をいかに事前に的確に判断するかが重要な任務だと考えている。

「大自然のなかの巨大なセメントの塊は、もはや生命体の想像力を超えていて、究極の不自然なのにそう感じることができない」（『サバイバル！』ちくま新書）と書いているが、私もまた、技術の粋を集めた人工美の偉容に圧倒された。
のべ約四百四十万人が建設工事に従事し、総工費約千八百六十億円。四つの発電機がすべて運転を開始したのは九五年のこと。八〇年に国の承認を得てから十五年を要した。上部の太田ダムの建設に携わった現・とのみね自然交流館の蕎麦職人、草壁敬一さんによれば、特に冬の寒さが厳しい現場だったという。それでも、ダムの底に大量の水が注がれ、ついに竣工を迎えた日には、「万歳」の歓声が沸き上がった。
現在、大河内発電所は、太田川上流の太田ダムと、犬見川中流にある長谷ダムの三九四・七mの高低差を利用して最大百二十八万kWの発電を行っているが、原子力や火力よりも短時間で起動できることから、消費電力の急増する昼間を中心に力を発揮する電源として稼働している。



キンシナンテンの「折鶴笹錦糸」



◀クロマツの「水犬松」

関西電力 山崎伝統園芸植物研究所

花変わり・葉変わりなど植物の「芸」が尊ばれた江戸時代——江戸の美意識と教養、それを支える職人の技によって生み出された「伝統園芸植物」の生体を収集・保存している日本唯一の研究所。長年、伝統園芸植物の栽培技術の確立と継承に取り組んでいる、所長の萩菓樹徳さんに話を伺った。



▶万両の播種床



伝統園芸植物を守る

旅の最後に向かったのは、神崎郡の隣り、揖保川沿いに広がる宍粟市しその山崎伝統園芸植物研究所である。私にとっては懐かしく、心が引き締まる場所だ。というのも、拙著『青いバラ』の取材でお目にかかって以来、たびたび園芸文化について貴重なご助言をいただいているナチュラリストの萩菓樹徳さんが所長をされているからである。研究所には七年ぶりの再訪となった。

伝統園芸植物とは、江戸時代の園芸家が彼らの価値観に基づいて野生植物を選抜育種し、園芸品種化した植物のことである。保護の対象とされていないことから、一刻と絶滅の危機に晒されている。幼い頃から伝統園芸植物の価値と栽培方法を学んできた萩菓さんは、これを世界に誇れる日本独自の「生きた文化遺産」と考え、全国から多様な品種を集めて保存に努めてきた。現在、松だけでも約百五十品種あるほか、富貴蘭ふうきらん、紫金牛やぶごうじなどの稀少品種が二千九百種、大切に栽培されている。

「葉がねじれていたり、斑入りであったり、いつてみればある種の奇形かもしれませんが、不自然ゆえによいと表現された人がいますが、むしろ、嬾なま（たお）やかな、あるいは嬾々なまなま（じょうじょう）たる美と表現した方がいいかもしれない。それが江戸の人々の価値観だったので。こうしたものを、もつことが教養の証になる文化があったことを日本人は忘れてはいけないと思います」



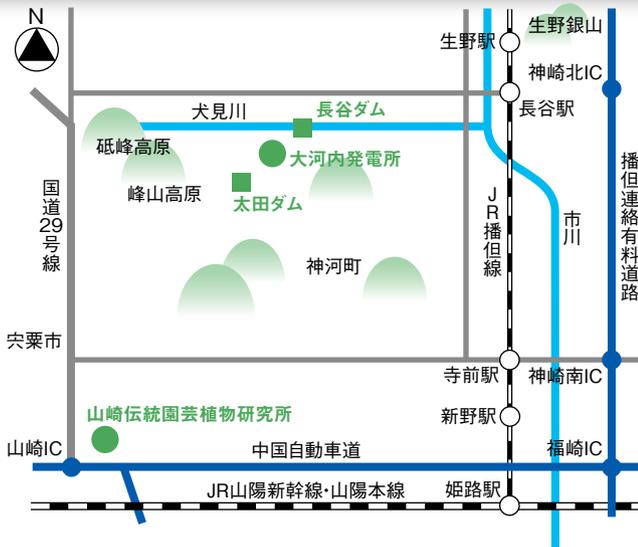
発電所と送電線をつなぐ50万ボルト開閉設備。電気はここから、いくつかの変電所を通り、大消費地である京阪神方面に送られる



山崎伝統園芸植物研究所



カラタチバナの「萌黄麟鳳」



クロマツの「扇松」

萩巢さんの意思と技術を嗣ぐ者がいなくなると、これらの伝統園芸植物も減ぶ。関西電力が運営を支援していることは一企業のCSRとしての意味を超え、日本人の文化遺産保護につながる意義深い活動であると思えた。「一つひとつの植物にストーリーがあるんです。能や歌舞伎は衰退したとしても復活させることができるけれど、生き物は滅びたらよみがえりません。一度なくしたら再現できないものは人間が守らなくてはいけないのです」

風変わりな伝統園芸植物との再会を果たし、私は、水車による町おこしも、すすきの草原や発電所も、もちろん伝統園芸植物も、日本人の歴史そのものであるとの思いを強くした。水車小屋の石臼やダム底に敷き詰めた岩のかけら一つとっても人の手を経なかったものはない。それは一日一日、精魂を込めて地道な努力を積み重ねてきた人々の生きた軌跡でもある。そのいずれもが美しかった。保護や保全、管理といった言葉ではなく、一人ひとりの「志」が受け継がれてきたことの証として、未来はきっと人々の営為を敬意をもって想起することだろう。

最相 葉月 さいしょう はつき

一九六三年東京都生まれ。三歳から二十五歳まで神戸在住。関西学院大学法学部卒。広告会社、出版社などを経てノンフィクションライターとして独立。科学技術と人間の関係性などをテーマに執筆活動を展開。主な著書「絶対音感」(小学館ノンフィクション大賞)、「星新一」(100話をくつった人)(講談社ノンフィクション賞 日本SF大賞、日本推理作家協会賞、大佛次郎賞)、「青いバラ」「いのち―生命科学に言葉はあるか」「なんといふ空」「東京大学応援部物語」など。